

集

俳句フォーラム

2020年10月 第77号



葱坊主

石川東児

菜の花や畑一枚の夕明り
葱坊主卒業写真セピヤ色
見も知らぬ児より挨拶土筆ン坊
涅槃西風離卿の疹き振り返る
屈託の枷を外して柳絮飛ぶ

仁上博恵

胡瓜

病む人を訪う桜蔭降るなかを
露の芽を摘んで懐旧贈らるる
新型コロナで自粛生活永き日を
四月馬鹿コロナマスクと老眼鏡
愛猫死すと友伝え来る卯月かな

小笠原妙子

初鯉

丹精もせぬ屑苺籠にあふれ
これという何も成さず六月尽
霍乱の後漸くに笑い合う
大空を自在に切って夏燕
夏燕自在に反転くり返す

うらら日のカフェの窓辺まどろめり
さ緑の香や指先に露の灰汁
新茶の香釣瓶で汲みし水ならば
田植機を操る傘寿心意気
初鯉捌き猫にもおすそわけ

河原散步

治部少輔

流失の橋の骸や桜降る
心太奥にアルプス座らせて
絮蒲公英飛んで休校日森閑と
クレマチス見とれつまづく飛び石に
水温む子らとの会話楽しめり

さくらんぼ

三柵 淳

短夜は逝く潮騒と鳶一羽
明易め夢は誰にも言えぬま
まんじりと看取りの一夜明早し
霍乱の一夜は明けて白湯甘く
そよ風のメロディ紡ぐさくらんぼ

溝

中山未奈藻

白き組板たちまち染まる茄子の紺
秩父路の同行二人白牡丹
確信め揺らぎつつあり七変化
子の墓にくゆる線香春の雲
埋められぬ溝の深さよ青梅落つ



マスク

渡辺節子

沙羅の花落ちる音して黙禱す
潮の香をかぐためずらす夏のマスク
薄荷抽添え夏のマスクを贈らるる
露蓬摘み食べ尽くすステイホーム
分け入っても分け入ってもコロナ

持ち時間

大山夏子

白梅の香るや男坂女坂
新型コロナナ出口が見えず梅雨走る
新緑や病みて無為にす持ち時間
耳ふさぐ高層階の夏嵐
登りきれず岩また転げ落つ子亀

若き日

中川のぼる

夏近し生めく予感漂いて
花咲き乱れ路さ迷いて無心
芥子の花若き日の無我いま何処
鬱念や泰山木の花咲けど
箱庭に希望の種を植えにけり

空

江口九星

この世をも無分別なる春の闇
夏蝶の高くたかくと空を分け
亡父の品鑑定たのみ春惜しむ
紫陽花の杖の音のみ遍路道
二羽の鳥無音のままに夏夕焼

ミステリー

伊藤昌枝

革命の色かも知れぬ赤き薔薇
毛虫落ついよよ佳境のミステリー
波音に茨の花の枝垂れけり
分け合いて植田潤す水路かな
小判草幽かに音を揺らしけり

トマト

吉宇田麻衣

無観客快音響き喜雨となる
あれこれに折り合いつけて風薫る
どれにする迷って今朝は夏みかん
夏の川映像でもふと旅気分
こだわりの産直トマト元気かな

無弦の琴

楠本和弘

仰ぎ見る分水嶺や四月尽
金雀枝や夢幻の琴の響きあり
短夜やメール句会の受信音
サーファアの描く航路や雲の峰
若竹や風を捉えて高々と

背負うもの

渡部恭子

ヨーガの気天地分けて新樹光
鞆で君居る空に分け入るや
背負うものまた増え青葉若葉かな
初めての出前は鰻チャイム鳴る
不協和音消えないままの梅雨満月

砂時計

小澤えみ子

七曜に分ける投葉若葉風
紅茶三分緑蔭の砂時計
母の日やおひたしに盛る花かつお
夏帽子羽根あるように弾みたる
熱帯魚熟女そろいの食事会

青い鳥

酒井たかお

捕食する蜥蜴の所作の早さかな
蚕豆の元気もらはむ酒の肴
日照雨来て蕃茄いよいよ赤味帯ぶ
青い鳥馬鈴薯掘りの輪の中に
額の花子らに囲まれ喜寿の雨



花杏

平野無石

何もかも変りし故郷花杏
読み返すカミユのペスト春愁
コロナ戦ゆるがす地球青嵐
閉店を惜しむ仲見世梅雨の蝶
コロナ明け祝う杖どち花は葉に

花の道

都築繁子

閉校の校庭しんと桜満つ
リハビリの日々やゆるりと花の道
いつまでか自粛のくらし花は葉に
地下鉄を降りてデパ地下さくらんぼ
薫風や間隔置いて憩う椅子

旅

植木やす子

筍の小鉢に香る山椒の葉
籠る日の解ける日待つや麦の秋
ひと吹きのアアルコール手に春終る
夏帽子ゆるく畳んで旅支度
紫陽花の色移りきて雨を呼ぶ

初鯉

田中藤穂

砂文字はステイホームと春の海
雀の子コロナ休校つづきをり
土産よと桑の実を出しほほえめる
誰も彼もコロナのマスク梅雨に入る
コロナ騒ぎ食べそこねたる初鯉

春の雪

篠田純子

春の雪紅茶にたんとミルク注ぐ
気管支より肺へ伝はりゆく余寒
せっかちに話す娘やヒヤシンス
夕焼けを映すビル群マジックアワー
伸びてゆく我が住宅の影薄暑

白牡丹

大山夏子

薄紅梅何恥じらうか少女らの
つくしんぼの行列車間距離のよう
甕の中の目高に声かけ覗きこむ
遠き日も母伴いて白牡丹
診断はヘルペス紫陽花買い求め